『筑波日本語研究』創刊号 筑波大学文芸・言語研究科 日本語学研究室 1996

ダケによる〈限定〉と数量詞による〈修飾〉

安部朋世

キーワード：ダケ、個体限定、事態そのものの限定、
事態存在の有無を問題とする事態限定、数量詞による量規定

要　旨

ダケのスコープについては、安部 1996 で、ダケのスコープが越えることを許す節境界として大島 1988、1995 の〈集合限定〉の連体節を指摘した。このタイプの連体節を含む文は、ダケが連体節内にあるにも関わらず、ダケのスコープが連体節を越える解釈が許容される。

このタイプの文は、ダケが連体節内に位置することから、ダケのスコープが連体節内にとどまる解釈も同時に許容されることが期待されるが、実際には、「名詞＋ダケ＋助詞」と「名詞＋助詞＋ダケ」のように連体節内でダケの位置をかえることにより、ダケのスコープが連体節を越える解釈と連体節内にとどまる解釈の許容度が異なることが観察される。また、ダケのかわりにダケの位置に数量詞を置いた文にも、同様の両義性が観察される。

このように、ダケの位置によって解釈に差が生ずるという現象は、ダケの限定の仕方に〈個体限定〉と〈事態限定〉という大きく２通りの限定の仕方があり、その２通りの限定の仕方と集合限定の連体節におけるダケのスコープとの関係から、３通りの解釈が可能となるが、３種類の解釈が表す事象が近似して区別されないことや、文脈からその事象が許容されないことがあるために、文によって解釈の許容度に差が生ずると考えられる。

一方、数量詞については、〈個体に直接関わる量〉と〈動作実現量〉という数量詞の表す量の違いによるものと考えられ、両者に共通の現象がみられるのは、ダケによる限定と数量詞による量規定が広く「限定」という点で共通することによるものであり、それぞれの限定または量規定の仕方は異なるものである。

1　問題の所在

ダケのスコープについては、節境界がダケのスコープの最大範囲を決める重要な要素となっていることを示唆する現象がいくつか指摘されている。安部 1996 では、どのような節の節境界がダケのスコープをブロックし、どのような節の節境界がダケのスコープをブロックしないかについて包括的に整理し、大島 1988、1995 の〈集合限定〉の連体節*1がダケのスコープをブロックしないことを指摘した。たとえば、次の(1)(2)を比較されたい。(1) はダケのスコープをブロックすると考えられる引用節*2の例、(2) はダケのスコープが越えられる集合限定の連体節の例である。

(1) a　監督は、「通行人役は津川ダケだ」と言った。
　　(監督の一言で通行人役は津川１人に決まった)
　b　監督は、「通行人役は津川だ」とダケ言った。
　　(監督は他のことは何も言わずその一言のみを言った)

(1) では、引用節内にダケがある a. にはダケが引用節内に働く解釈のみがなされ、引用節外にダケが位置する b. にはダケが引用節外に働く解釈のみがなされることから、引用節はダケのスコープをブロックすると考えられる。これに対し、(2) ではダケのスコープが連体節内にあるにも関わらず、ダケのスコープが連体節を越えた解釈が可能である。

(2) a　ダイアナ妃ダケと会見したことがある。
　b　ダイアナ妃とダケ会見したことがある。

(2) は a.b. ともにダケが連体節内に位置しているが、「ダイアナ妃以外と会見したことがない」という連体節外にダケが働いたと考えられる解釈が許容される。

ところで、ダケのスコープが越えられる(2) のようなタイプの文は、ダケが連体節内に位置することから、ダケのスコープが連体節内を範囲とする解釈も同様に許容されることが期待されるが、例文を観察すると、「名詞＋ダケ＋格助詞」の位置にダケを置いた a. と「名詞＋格助詞＋ダケ」の位置にダケを置いた b. とでは、許容度に差が認められる。なお、「{内}」はダケのスコープが連体節内を範囲とする解釈、「{外}」はダケのスコープが連体節を越える解釈であり、「◎」優先的な解釈、「??」は許容度の低い解釈であることを示す。

(3) a　太郎は女子学生ダケに英語を教えたことがある。
　　◎ {内} 太郎は女子学生のみのクラスで教えた経験がある
　　{外} 太郎は女子学生以外に教えた経験がない
　b　太郎は女子学生にダケ英語を教えたことがある。
　　?? {内} 太郎は女子学生のみのクラスで教えた経験がある
　　◎ {外} 太郎は女子学生以外に教えた経験がない

(4) a　王子はダイアナ妃ダケと出掛ける権利がある。
　　◎ {内} ダイアナ妃と２人で出掛ける権利がある
　　{外} ダイアナ妃以外の王族と出掛ける権利はない
　b　王子はダイアナ妃とダケ出掛ける権利がある。
　　{内} ダイアナ妃と２人で出掛ける権利がある
　　◎ {外} ダイアナ妃以外の王族と出掛ける権利はない

(5) a　この組織は教祖ダケと修行した人がいる。
　　◎ {内} 教祖とのみ修行した人が存在する
　　?? {外} 教祖以外と修行した人はいない
　b　この組織は教祖とダケ修行した人がいる。
　　{内} 教祖とのみ修行した人が存在する

◎｛外｝教祖以外と修行した人はいない

(3) は Harada & Noguchi1992a において b. に｛内｝の解釈はないと観察された例であるが、確かに｛内｝の解釈は感じにくい。しかし、(4)b は｛外｝の解釈の方が優先的ではあるが、(3)b よりも｛内｝の解釈が許容されやすい。また、(3)(4)の a. は｛内｝の解釈が優先的ではあるものの両義性が感じられるが、(5)a では｛外｝の解釈が困難である。このような｛内｝の解釈と｛外｝の解釈の許容度の差は、何を表しているのであろうか。

また、(2) と同様の現象が現れる文は、ダケを含む文に限らない。次のように、数量詞を含む文にも両義性が感じられる。

(6) a　彼は、有名な漫才師２人に会ったことがある。

横山やすし・西川きよしの２人が一緒の所に遭遇した経験がある

横山やすし・西川きよし以外には会ったことがない

b　彼は、有名な漫才師に２人会ったことがある。

??　横山やすし・西川きよしの２人が一緒の所に遭遇した経験がある

横山やすし・西川きよし以外には会ったことがない

(6) はダケのかわりに数量詞「２人」の位置をかえた文である。「名詞＋数量詞＋格助詞」の位置に置いた a. と「名詞＋格助詞＋数量詞」の位置に置いた b. を比べると、b. には「２人同時に」という、ダケの場合の｛内｝の解釈が困難になり、(2) と同様の現象がみられる。数量詞におけるこのような現象はどのように説明されるのであろうか。ダケと数量詞との何らかの共通性から説明されるものなのだろうか。

本稿では、以上のような現象を踏まえ、つぎの２点を問題として設定する。

(7) a　ダケのスコープが越えることを許容する連体節 - 集合限定の連体節を含む文において、ダケの位置によって｛内｝の解釈と｛外｝の解釈に許容度の差が生ずるのは、何によるものなのか。

b　a. の現象がみられる文のダケを数量詞に置き換えた文にも同様の現象がみられるが、これはダケと数量詞の何らかの共通性から説明されるものか、それとも結果として現象が共通するものなのか。

2　現象の観察

本節では、考察にはいる前に、前節で挙げた例文を含め、同様の現象が現れる文について、それらの文に可能な解釈をできるだけ詳しく記述する。まず、前節で挙げた例文を再掲する。

(8) a　太郎は女子学生ダケに英語を教えたことがある。

◎｛内｝太郎は女子学生のみのクラスで教えた経験がある

｛外｝太郎は女子学生以外に教えた経験がない

b　太郎は女子学生にダケ英語を教えたことがある。

??｛内｝太郎は女子学生のみのクラスで教えた経験がある

◎｛外｝太郎は女子学生以外に教えた経験がない

(9) a　王子はダイアナ妃ダケと出掛ける権利がある。

◎｛内｝ダイアナ妃と２人で出掛ける権利がある

｛外｝ダイアナ妃以外の王族と出掛ける権利はない

b　王子はダイアナ妃とダケ出掛ける権利がある。

｛内｝ダイアナ妃と２人で出掛ける権利がある

◎｛外｝ダイアナ妃以外の王族と出掛ける権利はない

(10) a　この組織は教祖ダケと修行した人がいる。

◎｛内｝教祖とのみ修行した人が存在する

??｛外｝教祖以外と修行した人はいない

b　この組織は教祖とダケ修行した人がいる。

｛内｝教祖とのみ修行した人が存在する

◎｛外｝教祖以外と修行した人はいない

これらの例文で、(9)と(10)の｛内｝の解釈を比べると、解釈が異なることに気づく。(9)の「ダイアナ妃と２人で出掛ける権利」とは「ダイアナ妃と１対１で出掛ける権利」を指すが、(10)の「教祖とのみ修行した人」は「教祖と修行して教祖以外とは修行していない人」という人物を指すと考えられる。もちろん、(9)の｛内｝の解釈として「ダイアナ妃と出掛け、ダイアナ妃以外とは出掛けなくてよい権利」も認められるし、(10)の｛内｝の解釈として「(教祖と幹部の複数の指導的立場の人と一緒に修行したこともあるが）教祖と１対１で修行した人」と解することも可能である。つまり、｛内｝の解釈には、２通りの解釈が可能であることが観察されるのである。

数量詞の場合はどうであろうか。

(11)a　彼は、有名な漫才師２人に会ったことがある。

横山やすし・西川きよしの２人が一緒の所に遭遇した経験がある

横山やすし・西川きよし以外には会ったことがない

b　彼は、有名な漫才師に２人会ったことがある。

??　横山やすし・西川きよしの２人が一緒の所に遭遇した経験がある

横山やすし・西川きよし以外には会ったことがない

(11)a. では、「２人一緒の所に」と「２人以外には会っていない」という解釈が自然であるが、次のような文にすると、「２人にバラバラに会った」という解釈も可能になる。

(12)　彼は、有名な漫才師２人にバラバラに会ったことがある。

また、b. も次のような文にすると、「２人一緒に」の解釈が許容される。

(13)　彼は、有名な漫才師に２人いっぺんに会ったことがある。

ただし、この場合にも、「その漫才師２人以外」については「会ってない」という解釈が強いように感じられ、その点は a. と異なる。

この他、同様の両義性が感じられる例文として、以下のものが挙げられる。

(14) a　担任する生徒の母親ほとんどに会ったことがある。
　　b　担任する生徒の母親にほとんど会ったことがある。
(15) a　担任する生徒の母親全員に会ったことがある。
　　b　担任する生徒の母親に全員会ったことがある。
(16) a　担任する生徒の母親大部分に会ったことがある。
　　b　担任する生徒の母親に大部分会ったことがある。
(17) a　担任する生徒の母親一部に会ったことがある。
　　b　担任する生徒の母親に一部会ったことがある。
(18) a　担任する生徒の母親多数に会ったことがある。
　　b　担任する生徒の母親に多数会ったことがある。
(19) a　担任する生徒の母親多くに会ったことがある。
　　b　担任する生徒の母親に多く会ったことがある。

先に挙げた数量詞の例は、「数＋助数詞」のタイプであったが、(14)から(19)の例文は、それ以外の、数量の多少・集合の全体部分を表す数量詞や、量を表す副詞に分類されるものである*3。これらの例文についても、a. には「母親のほとんど／全員…に（一度に）会った経験がある」という解釈と「今までに会った母親の数を合計すると、ほとんど／全員…になる」という解釈が可能であるが、b. には「今までに会った母親の数を合計すると、ほとんど／全員…になる」という解釈は優先的であるが、「母親のほとんど／全員…に一度に会った経験がある」という解釈は困難であり、(11)と同様の現象が観察される。
以上の観察をもとに、それぞれの場合について、以下検討を進める。

3　ダケの場合

本節では、前節で挙げた問題の一つである、ダケの例文における｛内｝の解釈と｛外｝の解釈の許容度の差について考える。

3．1　ダケによる限定の仕方

本稿で問題とする例文の検討に入る前に、まず、ダケの限定の仕方についてみておくことにする。

ダケの意味は一般に〈限定〉とされ、文中の様々な要素に接続して限定するものと説明される*4が、その「限定の仕方」をみると、大きく〈個体限定〉と〈事態限定〉に分けることができると考える。次に、それぞれの例を示す。

まず、〈個体限定〉の例である。

(20)　このところ集団食中毒が流行っていてこのクラスも欠席者が多かったが、昨日は、田中君ダケが欠席した。食中毒もようやく下火になったようだ。

(20) は「クラスの構成員」という複数の個体の中から「欠席者」を「田中君」に限定している。

これに対し、次の(21) は、事態を限定している例である。

(21)　最近の若者は不真面目で困る。最近雇ったアルバイトの学生も、おしゃべりダケして、時間になると仕事を残してさっさと帰ってしまう。

(21) は、アルバイトの学生がアルバイトに来てすることを、「仕事をする」「掃除をする」などの複数の事態の中から「おしゃべりをする」ということに限定している文である。

以上、ダケによる限定の仕方をまとめると、次のようになる。

(22)　ダケによる限定の仕方：

a　複数の個体の中での〈個体限定〉

b　複数の事態の中での〈事態限定〉*5

3．2　ダケのスコープが越えることを許容する連体節を含む文における3種類の限定

2節の現象の観察において、ダケを含む文の｛内｝の解釈に2通りあることを指摘したが、ここで、ダケによる2種類の限定の仕方を踏まえて、本稿で問題とするダケの例文をみてみると、｛内｝の解釈と｛外｝の解釈という2種類の解釈は、厳密には次のような3種類の限定に捉え直すことができる。次に、1節で挙げた例文(2) を再掲する。

(23) a　ダイアナ妃ダケと会見したことがある。

b　ダイアナ妃とダケ会見したことがある。

｛内｝の解釈とは、ダケのスコープが連体節内にとどまる解釈であり、｛外｝の解釈はダケのスコープが連体節を越える解釈であった。よって、｛内｝の解釈、｛外｝の解釈は、それぞれ、次のように考えられる。

(24) a　｛内｝：ダイアナ妃以外とは会見しなかったことがある

b　｛外｝：ダイアナ妃以外と会見したことはない

｛外｝の解釈は、「チャールズ皇太子と会見した」「エリザベス女王と会見した」などの複数の事態の中から「ダイアナ妃と会見した」という事態に限定し、それ以外の事態の存在を否定する解釈であるので、事態限定に分類できるが、その中でも「～がある／ない」という「事態の存在の有無」を問題にしている文だと考えられる*6。ここで、｛外｝の解釈における事態限定を〈事態存在の有無を問題とする事態限定〉と呼ぶことにする。

一方、｛内｝の解釈は、「ダイアナ妃と会見した」という連体節内にダケのスコープが及ぶ解釈であるが、この場合、ダケによる限定の仕方には、次のように、個体限定と事態限定の2種類が考えられる。

(25)　チャールズ皇太子との離婚問題がお互いの非難と暴露合戦になり泥沼化の様相を見せてから、公式行事にこそ姿を見せるものの、すっかり口を閉ざしていたダイアナ妃だったが、離婚調停が軌道に乗ってきてからは、ようやく自らのことを語るようになった。その頃熱心に取材の申し込みをしていた我が社の記者は、ダイアナ妃ダケとの会見ーつまり、ダイアナ妃と１対１での単独インタビューに成功し、大スクープとなったことがある。

(26)　チャールズ皇太子とダイアナ妃の離婚問題が起こっていたとき、ダイアナ妃への同情が集まり、マスコミもダイアナ妃への取材が多くなっていった。それがもっとも露骨な形に出た例として、チャールズ皇太子や他の王族の公式行事とダイアナ妃単独のクラシック演奏会出席が重なった日に、マスコミはこぞってダイアナ妃の取材をし、演奏会後にはインタビューまでとって報道したのに対し、チャールズ皇太子などにはまったく取材・コメントをとらないで行事の簡単な紹介のみの報道をしたため、英王室から公式にクレームが付いたことがあった。

(25)(26)はいずれも「ダイアナ妃以外との会見」という事態の存在を否定しているわけではないので、{外} の解釈ではなく {内} の解釈であるが、限定の仕方が異なる。(25)は一回の会見の際の会見相手を限定していることから、「会見の相手」の集合から「ダイアナ妃」という個体に限定する個体限定の例であり、(26)はある一定期間（この場合はある１日の間）における事態について「ダイアナ妃と会見した」という事態に限定する事態限定の例だと考えられる。このような {内} の解釈における事態限定を、{外} の解釈における事態限定である〈事態存在の有無を問題とする事態限定〉と区別するために、〈事態そのものの限定〉と呼ぶことにする。

このように、ダケのスコープが越えることを許容する、集合限定の連体節を含む文には、ダケによる限定の仕方から、〈個体限定〉〈事態そのものの限定〉〈事態存在の有無を問題とする事態限定〉の３種類の限定の存在が考えられるのである。

しかし、現実の事象では、この３種類の区別がいつも明確にあるとは限らない。個体限定と事態そのものの限定は同じ {内} の解釈ということから近似した事象を指す場合があり、事態そのものの限定と事態存在の有無を問題とする限定の間にも同じ「事態限定」ということから近似した事象を指す場合が生ずる。

(23)の「ダイアナ妃との会見」を例にとってみる。

まず、個体限定と事態そのものの限定については、「ダイアナ妃と会ってダイアナ妃以外とは会わなかったことがある」という事態そのものの限定が指す事象は、「そのときダイアナ妃＋それ以外の人物と会見した」ことを否定しているので、「ダイアナ妃と１対１で会った」という個体限定が指す事象と重なることになる。もちろん、個体限定の場合「ダイアナ妃＋ダイアナ妃以外の人物と会ったことがある」という事態を否定していないので、

事態そのものの限定と完全に一致するものではない。しかし、重なり合う部分があるため、同じ事象を指すようにみえるのである。

また、事態そのものの限定と事態存在の有無を問題とする事態限定についても、事態そのものの限定が表す「ダイアナ妃と会見してダイアナ妃以外の王族とは会見しなかったことがある」という事象は、「ダイアナ妃以外の王族とは会見しなかった」という事象が存在する期間が「ある一定の期間」であって「全経験ではない」と解釈される場合である。それに対し、事態存在の有無を問題とする限定は「ダイアナ妃以外の王族とは会見しなかった」という事象が存在する期間が「今までの経験すべて」と解釈される場合である。つまり、この二つの限定の違いは、限定される事態が存在する期間をどの範囲と捉えるかの違いなのである。よって、「～ことがある」のように「全経験」と解釈されやすい文では事態存在の有無を問題とする限定の解釈が強くなり、どちらにも解釈されるような文では、その違いがはっきりとは現れなくなる。

このように考えると、本稿における問題点のひとつ、(7)a.「ダケの例文における｛内｝の解釈と｛外｝の解釈の許容度の差」については以下のように説明できる。すなわち、ダケの限定の仕方からは３種類の解釈が可能になるが、現実の事象に照らし合わせると、３種類の解釈が示す事象が近似するために３種類の解釈が感じられなかったり、文脈からその事象そのものが許容されずに３種類の解釈がなされないことが起こると考えられる。

最後に、ダケの位置と３種類の限定との関係についてみてみると、次のような傾向性がみられる。

まず、「名詞＋ダケ＋助詞」（例文の a.）では、｛内｝の解釈、とくに個体限定の解釈がされやすい*7。

また、「名詞＋助詞＋ダケ」（例文の b.）の場合は、事態存在の有無を問題とする限定の解釈が「名詞＋ダケ＋助詞」の文に比べて容易である。

以上をまとめると、以下のようになる。

(27) a　（ダケのスコープが越えることを許容する）集合限定の連体節を含む文において可能な解釈は次の３種類である。

｛内｝の解釈　１）個体限定

２）事態そのものの限定

｛外｝の解釈　３）事態存在の有無を問題とする事態限定

b　例文によっては、a. に挙げた３種類の解釈が感じられない場合がある。それは、現実の事象に照らし合わせると３種類の解釈が示す事象が近似して区別されないことや、文脈からその事象そのものが許容されないためである。

c　ダケの位置と３種類の限定との関係については、次のような傾向性がみられる。

「名詞＋ダケ＋助詞」…｛内｝の解釈でとくに個体限定の解釈がなされやすい

「名詞＋助詞＋ダケ」…事態存在の有無を問題とする限定が相対的に容易である

4　数量詞の場合

次に、ダケと同様の両義性が感じられる文として指摘した、数量詞文について考える。数量詞についてはいくつかの先行研究がある*8が、本稿では、矢澤 1985 での指摘に基づいて、本稿で問題とする現象を考えることにする。

4．1　〈同時量〉と〈達成量〉、〈名詞に直接関わる量〉と〈動作実現量〉

矢澤 1985 では、まず、次のような例文の比較から、数量詞を〈達成量〉を表すものと〈同時量〉を表すものに分ける。

(28) a　牛肉 500g を食べた。
　　b　牛肉を 500g 食べた。
(29) a　学生５人が橋を渡った。
　　b　学生が５人橋を渡った。

(28)(29)はともに数量詞を「名詞＋数量詞＋助詞」の位置にも「名詞＋助詞＋数量詞」の位置にも置くことができるが、「～しはじめる／～しつづける」という文にすると、次のように許容度に差が生ずる。

(30) a　牛肉 500g を食べはじめる／食べつづける。
　　b ? 牛肉を 500g 食べはじめる／食べつづける。
(31) a　学生５人が橋を渡りはじめる／渡りつづける。
　　b　学生が５人橋を渡りはじめる／渡りつづける。

(28) a.(29) a. の「名詞＋数量詞＋助詞」では「～しはじめる／～しつづける」の文にした(30) a.(31) a. ともに自然な文であるが、(28) b.(29) b.「名詞＋助詞＋数量詞」の場合になると、「～しはじめる／～しつづける」の文にした(30) b. の方が(31) b. より許容度が落ちる。

これは、(28) b. と(29) b. の数量詞がそれぞれ同時量と達成量という異なる量を表すためだと説明する。

〈達成量〉とは、「動作・作用に伴って増減し、その完了時に達成される量」のことを指す。(28) b. は「牛肉を食べ終わった時点での食べた牛肉の量が 500g である」という文であり、「500g」は達成量を表している。よって、動作や作用の開始や中途の位相についての表現(30) b. では、数量詞の表す達成量が文の表す位相と矛盾するために許容度が下がるのだと考えられる。

一方、〈同時量〉とは、「動作・作用の行われるのと同時に実現される量」のことである。

(29)b. は、「ひとりずつが橋を渡って渡った学生の合計人数が５人に達した」という達成量の読みの他に、「５人が同時に橋を渡った」という同時量の解釈も可能である。同時量の場合、「５人が同時に渡りはじめる／渡りつづける」ということが考えられるので、(31)b. のように「～しはじめる／～しつづける」の表現にしても不自然さは感じられないのだと考えられる。

このように、達成量と同時量に分けた上で、「名詞＋数量詞＋助詞」の位置にくる数量詞と「名詞＋助詞＋数量詞」の位置にくる数量詞について、次のように述べる。

まず、「～しはじめる／～しつづける」の文にしても不自然にならない「名詞＋数量詞＋助詞」の場合の数量詞は、現実の事象の上では達成量と同時量の区別をし得ても、「名詞＋助詞＋数量詞」の場合のような構文上の差が生じないことから、数量詞自体には区別がなく、〈名詞と直接関わる量〉だと述べる。

これに対し、「名詞＋助詞＋数量詞」の場合では、達成量と同時量はいずれも〈動作・作用の上で実現される量（動作実現量）〉だと述べる。

たとえば、達成量を表すと考えられる(28)b. も、次のように「500g 一度にほおばっている」という同時量を表し得る。動作実現時に同時に現れる量であるか達成の結果合計された量であるかの違いはあるにせよ、いずれも〈動作実現量〉にはかわりがない。

(30)b'　そのライオンは、牛肉を 500g いっぺんに食べはじめた。

また、「名詞＋数量詞＋助詞」が名詞と直接関わる量を表し、「名詞＋助詞＋数量詞」が動作実現量を表すという違いは、次の文からも支持される*[9]。

(32)a　水 50cc が少しずつ蒸発していたが、結局 20cc が蒸発して 30cc が残った。

b ? 水が 50cc 少しずつ蒸発していたが、結局 20cc が蒸発して 30cc が残った。

(32)a. は、「最初にあった水の量が 50cc」という解釈が可能なので、「50cc の一部の 20cc が蒸発して 30cc が水のまま残った」という文脈でも許容されるが、b. の「50cc」は「水の蒸発が完了したときの蒸発合計量」という動作実現量の解釈しか許さないので、「最終的に 20cc しか蒸発しなかった」という文脈と矛盾してしまうために許容度が下がると考えられる。

以上、矢澤 1985 に述べられた点をまとめると、次のようになる。

(33)　数量詞と〈動作実現量〉：

a 「名詞＋数量詞＋助詞」の場合

数量詞は〈名詞に直接関わる量〉であり、結果的に〈達成量〉と〈同時量〉の両方を表し得る

b 「名詞＋助詞＋数量詞」の場合

数量詞は〈動作実現量〉を表す

α．数量が動作・作用の完了時に達成される量のみを表すもののときは〈達成量〉のみを表す

β．数量が動作・作用の行われるのと同時に実現されると解釈できるときは〈達成量〉と〈同時量〉の両方を表し得る

4．2　数量詞の表す量と事象の解釈

本稿で挙げた数量詞の例文は次のものであった。

(34) a　彼は、有名な漫才師２人に会ったことがある。

　　b　彼は、有名な漫才師に２人会ったことがある。

(34) a. は「漫才師２人に - ２人一緒の所に／２人バラバラに - 会った経験がある」のように、複数の解釈が許容されるが、これは、矢澤 1985 によると、「名詞＋数量詞＋助詞」の場合は名詞に直接関わる量を表すと考えられることから説明できる。

一方、(34) b. は、「２人以外には会った経験がない」という解釈が自然な解釈であり、「２人一緒」という解釈も可能であるが、その場合も「その２人以外には会っていない」ということが強く感じられる。b. は「名詞＋助詞＋数量詞」の順に接続する例であり、矢澤 1985 によると、動作実現量を表す場合だと考えられる。この場合、「同時に２人に会った」と捉えれば同時量になり、「会った合計が２人」と捉えれば達成量になるが、(34) b. では達成量の解釈の方が自然な解釈だということになる。達成量の場合、動作・作用の開始や中途の位相についての表現にすると許容度が下がることが観察されたが、(34) b. についても同様に許容度が下がる[*10]。

(34) b' ？彼は、有名な漫才師に２人会っている最中だ。

このように、本稿で問題とした数量詞における両義性については、数量詞が名詞に直接関わる量を表すのか、動作実現量を表すのか、という、数量詞の表す量の違いに由来するものと考えられる。

5　副詞類の場合

２節では、「数＋助数詞」以外の数量詞・副詞類にも同様の現象がみられることを指摘したが、これらも、「～している最中である」という文にすると、副詞類の位置によって許容度の差があらわれる。

(35) a　担任する生徒の母親ほとんどに会っている最中だ。

　　b ？担任する生徒の母親にほとんど会っている最中だ。

(36) a　担任する生徒の母親全員に会っている最中だ。

　　b ？担任する生徒の母親に全員会っている最中だ。

(37) a　担任する生徒の母親大部分に会っている最中だ。

　　b ？担任する生徒の母親に大部分会っている最中だ。

(38) a　担任する生徒の母親一部に会っている最中だ。

b ? 担任する生徒の母親に一部会っている最中だ。

(39) a　担任する生徒の母親多数に会っている最中だ。

b ? 担任する生徒の母親に多数会っている最中だ。

(40) a　担任する生徒の母親多くに会っている最中だ。

b ? 担任する生徒の母親に多く会っている最中だ。

量の副詞である「ほとんど」は次のように動作・作用の完了を全体としたときの「大部分」が完了したことを表す。

(41)　論文はほとんど書き終わった。

このように、動作・作用の完了度を表すことから、「母親にほとんど会ったことがある」の量の副詞「ほとんど」が表すものも、動作実現量に言い換えられると考える。

また、「数詞＋助数詞」の形ではない数量詞においても、「名詞＋助詞＋数量詞」の文の場合、動作実現量を表しているといえる。

よって、これらの副詞や数量詞についても「２人」のような数量詞と同様に扱えると考える。

６　ダケと数量詞との共通点と相違点

以上、ダケと数量詞についてそれぞれ考察してきた結果、本稿で２点目の問題として挙げた「ダケと数量詞における共通の現象はどのように説明されるのか」についても次のように考えられる。

共通点としては、体節を含む文の場合、数量詞が連体節内に位置していても主節の表す事態の実現量を表し得ることが挙げられる。

一方、相違点としては、まず、「名詞＋ダケ／数量詞＋助詞」の場合、数量詞は名詞に直接関わる量を表すために結果として複数の解釈が可能となるのに対し、ダケはスコープの違いから解釈の複数性が説明される点が挙げられが、この「数量詞が名詞の量を規定する」ことは、ダケによる限定の仕方と数量詞による量規定の仕方全般にもつながるものだと考えられる。

(42) a　その記者はダイアナ妃ダケに会ったことがある。

b　その記者はダイアナ妃にダケ会ったことがある。

(43) a　その記者はダイアナ妃１人に会ったことがある。

b ?? その記者はダイアナ妃に１人会ったことがある。

(42) a. には「ダイアナ妃以外の個体はいない状態」という個体限定と「ダイアナ妃に会ったことのみ存在する」という事態限定があり、b. の自然な解釈としては事態限定の解釈が考えられ、いずれも不自然な文ではないが、(43) の場合、動作実現量を表すことが期待されるる b. は非常に許容度が下がる。これは、b. における数量詞が、「ダイアナ妃」と呼ば

れる複数の人物の中から記者が会った人数を量規定するものであり、現実には「ダイアナ妃」と呼ばれる人物を複数想定することが困難なためだと考えられる。a. についても、「複数のダイアナ妃の中の１人」という想定は困難なために、その解釈は感じられず、「わたし１人」の場合と同様の「ダイアナ妃以外の個体ではなく」という限定的な意味に解釈される。このように、数量詞は、動作の実現に際して規定される名詞の量も名詞を直接規定する量も、いずれも「名詞の数量」を規定していると考えられる。

これに対し、ダケは限定を表し、個体限定は「個体の限定」を、事態限定は「事態の限定」を、というように、何を限定するかによって意味に違いが生ずる。よって、ダケの場合は「名詞＋ダケ＋助詞」に個体限定と事態限定という異なる限定の仕方が存在すると考える。

次のように、名詞が複数性を有する場合は、数量詞による量の規定とダケによる限定が近似してくる。

(44) a　その教授は女子学生ダケに会ったことがある。

　　b　その教授は女子学生にダケ会ったことがある。

(45) a　その教授は女子学生５人に会ったことがある。

　　b　その教授は女子学生に５人会ったことがある。

(45) の数量詞は、名詞「女子学生」が複数性を有することから、「女子学生」の人数を「５人」に量規定することが「女子学生」のみに限定することと同じ事柄を指す場合が考えられるため、(44) と (45) の a.b. に現れる意味が近く感じられるのである。

このように、ダケは「個体」を限定する場合と「事態」を限定する場合が存在するのに対し、数量詞は「名詞の数量」の規定である、という点が大きく異なる。よって、現象としてはダケと数量詞に共通する現象が観察されるのは、ダケによる限定と数量詞による量規定が広く「限定」という点で共通し、それぞれの表す事象が近似するために起こるものだと考えられる。

7　結論

本稿での結論は以下のとおりである。

(46)　ダケによる限定：

　a　（ダケのスコープが越えることを許容する）集合限定の連体節を含む文において可能な解釈は次の３種類である。

　　{内} の解釈　1）個体限定

　　2）事態そのものの限定

　　{外} の解釈　3）事態存在の有無を問題とする事態限定

　b　例文によっては、a. に挙げた３種類の解釈が感じられない場合がある。それは、

現実の事象に照らし合わせると３種類の解釈が示す事象が近似して区別されないことや、文脈からその事象そのものが許容されないためである。

c　ダケの位置と３種類の限定との関係については、次のような傾向性がみられる。

「名詞＋ダケ＋助詞」…｛内｝の解釈でとくに個体限定の解釈がなされやすい

「名詞＋助詞＋ダケ」…事態存在の有無を問題とする限定が相対的に容易である

(47)　数量詞の表す量：

a　数量詞の位置とその表す量との関係は次の通りである。

「名詞＋数量詞＋助詞」…数量詞は名詞に直接関わる量であり、結果的に達成量と同時量の両方を表し得る

「名詞＋助詞＋数量詞」…数量詞は動作実現量を表す

α．数量が動作・作用の完了時に達成される量のみを表すもののときは達成量のみを表す

β．数量が動作・作用の行われるのと同時に実現されると解釈できるときは達成量と同時量の両方を表し得る

b　「名詞＋数量詞＋助詞」の場合に複数の解釈が許容されるのは、数量詞が名詞に直接関わる量を示し、文の表す事態に制限されないためだと考えられる。それに対し、「名詞＋助詞＋数量詞」の場合に自然な解釈が「その文が表す事態の実現の結果の合計」という解釈に限られるのは、その位置にある数量詞が動作実現量を表すためである。

c　「数＋助数詞」以外の数量詞や量を表す副詞についても同様に考えられる。

(48)　本稿で設定した問題は、以上の考察から次のように説明される。

a　ダケの位置によって｛内｝の解釈と｛外｝の解釈に許容度の差が生ずることについて：(46)b. で説明される

b　ダケと数量詞で同様の現象が観察されることについて：

ダケは個体限定と事態限定の大きく２通りの限定の仕方があり、何を限定するかによって観察されるような現象がみられるのに対し、数量詞は個体に直接関わる量と動作実現量という数量詞の表す量の違いによるものとかんがえられる。両者に共通の現象がみられるのは、ダケによる限定と数量詞による量規定が広く「限定」という点で共通することによるものであり、それぞれの限定または量規定の仕方は異なるものである

本稿では、ダケと数量詞に共通してみられる現象に注目して考察したが、広く「連用修飾」「限定」として捉えると、ダケや数量詞以外にも様々なものが挙げられる。今後はそれらを含めた考察が課題となる。

注

*1 大島 1988、1995 では、連体節を〈集合限定〉の連体節と〈属性限定〉の連体節（大島 1988 の用語では「限定的修飾」と「非限定的修飾」）に分ける。〈集合限定〉の連体節とは、被修飾名詞Nの集合から連体修飾節Sの集合を切り出す機能をもつ連体修飾節構造のことを指す。

*2 引用節の定義は砂川 1989 に従う。

*3「ほとんど」などここに挙げた語ひとつひとつがどのような品詞に分類されるかについては、研究者によって異同がみられる。程度副詞の研究として、たとえば工藤 1983 等が挙げられる。しかし、本稿では個々の語の品詞については問題としない。

*4 ダケは「副助詞」に分類されてきたが、最近の研究では、沼田 1986、寺村 1991 等で「取り立て」の機能をもつ助詞として研究されている。本稿ではダケが「取り立て助詞」に分類されるか否かについては言及しない。

*5〈事態限定〉には、次のように、変化するものごとのある段階に限定するものも考えられる。

最新研究でつくられたクローンの鶏の卵は、ほとんどが孵化に失敗し、唯一孵化した卵も、雛になったダケで、1週間で死亡し、成鳥にまでは育たなかった。

これは、「卵→雛→成鳥」という鶏の成長の「雛」という段階にとどまった、という文であり、変化のある段階をダケが限定していると考えられる。しかし、これも事態のある局面を限定していることから、〈事態限定〉に分類できる。よって、〈事態限定〉には、本文の例に挙げた〈範列的な事態の中からの事態限定〉と、ここに挙げたような〈事態が同一時空間上に並びものごとの変化として捉えられる際の変化の一段階としての事態限定〉が含まれると考えられるが、本稿では、変化の段階限定の例は扱わないため、本文では〈範列的な事態の中からの事態限定〉のことを単に〈事態限定〉と呼ぶことにする。

*6 本稿でダケのスコープが越えることを許容する境界をもつ例文として挙げた例文は、「～がある／いる」という存在を表す文ばかりであるが、安部 1996 でも指摘したように、ダケのスコープが越えられる〈集合限定〉の連体節文には、存在述語ではない文も挙げられる。しかし、〈集合限定〉であるということは、限定した要素の存在とともに限定した以外の要素の存在を否定することを意味し、「事態の存在の有無」が問題とされる文であることにはかわりがないと考えられる。

*7 ダケが名詞の直後に位置する場合と助詞に後接する場合との違いについては、先行研究でもたびたび触れられているが、「名詞＋ダケ＋助詞」の場合は「名詞を直接限定する」と考える先行研究も山田 1908 等いくつかある。しかし、本稿での個体限定の解釈が「名詞＋ダケ＋助詞」の文になされやすいという指摘は共通するものがあるが、本稿は「名詞＋ダケ＋助詞」の場合に個体限定のみがなされると主張するものではない。

*8 数量詞についての先行研究には、矢澤 1985 の他に、奥津 1983、北原 1994、1995、三原 1994 などが挙げられる。

9 矢澤 1985 には、a.「 肉を少しずつ 500g 食べている」が達成量の動作進行の読みにならないことを「名詞＋助詞＋数量詞」型が〈動作実現量〉を表すことの根拠にしているが、自ら b.「肉を 500g 少しずつ食べている」にすると達成量の動作進行の読みが生ずることを指摘していることから、このことは根拠と

しては不適切だと考える。b. 文が達成量の動作進行の読みとして自然であることから、「名詞＋助詞＋数量詞」の数量詞は、動作実現が予定されていれば、その動作の進行を表すことができると考えられる。ただし、(22)b. が不自然になることから、その数量は動作が完了したときにはその量が達成されなければならない、つまり、〈動作実現量〉であるといえる。

*10 この文を「漫才師２人に会うことがその記者のその日の仕事であり、漫才師２人に会ったところで“記者のその日の仕事”というひとつの事態が完了する」という文に解釈すると、漫才師ひとりひとりに会っていても「記者のその日の仕事」という事態の進行中だと考えられ、許容度が上がる。しかし、その際も「漫才師２人と同時に」という解釈ではなく、「漫才師ひとりひとりに会う」という解釈にはかわりがない。

参考文献

安部朋世　1996「ダケのスコープと文中における境界」(未刊行)

大島資生　1988「連体節内要素の後置について――研究する人がいないんですよ、後置文を。――」『論集ことば』東京都立大学

――――　1995「「は」と連体修飾節構造」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版

奥津敬一郎 1974『生成日本文法論』大修館書店

――――　1976「補文構造としての変化文―「～ニナル」「～ニスル」―」『研究報告「日本語文法の機能的分析と日本語教育への応用」』昭和 50 年度科学研究費補助金試験研究(１)課題番号 089011

――――　1983「数量詞移動再論」『人文学報』160

――――　1986「とりたて詞の分布と意味―「でだけ」と「だけで」―」『国文目白』25

北原博雄　1994「数量詞の連用修飾機能――数量詞と先行詞との関係――」『東北大学文芸研究』137

――――　1995「連用用法における個体数量詞と内容数量詞――計量方法の二面性――」国語学会平成７年度秋季大会発表要旨

工藤浩　1983「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院

久野暲　1983『新日本文法研究』大修館書店

近藤泰弘　1982「副助詞の体系―現代日本語―」『日本女子大学文学部紀要』32

M.Sano　1985 'LF-Movement in Japanese' *Descriptive and Applied Linguistics 18* International Christian University

――――　1988 'An LF-Representation Filtered Out' *Studies in Language and Culture 14* Hiroshima University

――――　1989 'A Condition on LF-Representations' *Tsukuba English Studies Vol.8* Tsukuba University

佐野真樹　1996a「副助詞ダケの統語論的意味論」　日本言語学会第 112 回大会口頭発表

――――　1996b「ダケとデ、具格と場所格、および非述語の述語性について」未公刊論文

砂川有里子 1989「引用と話法」『講座日本語と日本語教育』４　明治書院

寺村秀夫　1975 ～ 1978「連体修飾のシンタクスと意味　―その１～その４―」『日本語と日本文化』４～７(『寺村秀夫論文集』Ⅰ　くろしお出版　所収)

———— 1984、1991『日本語のシンタクスと意味』Ⅱ、Ⅲ くろしお出版
丹羽哲也 1992「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44
沼田善子 1986「第２章 とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
———— 1989「とりたて詞とムード」『日本語のモダリティ』くろしお出版
———— 1991「とりたて詞文の二義性」『日本語・日本文学』３ 同志社女子大学
———— 1994「とりたて詞「だけ」と条件節をめぐる解釈の二義性」理論言語研究会口頭発表
沼田善子・徐建敏 1995「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
沼田善子 1996「とりたて詞「だけ」と条件節をめぐる解釈の二義性」つくば言語文化フォーラム口頭発表
Y.Harada & N.Noguchi 1992a. 'On the Semantics and Pragmatics of dake(and only)' In the proceedings of the SALT Ⅱ The Ohio State University Press
N.Noguchi & Y.Harada 1992b. 'Semantic and Pragmatic Interpretation of Japanese Sentences with DAKE(ONLY)' In the proceedings of COLING '92
野口直彦＆原田康也 1993「「だけ」についての意味論的・語用論的考察」日本認知科学会第 10 回大会発表要旨
———— 1994a.「とりたて助詞と量的解釈」日本認知科学会第 11 大会ワークショップ発表要旨
———— 1994b.「とりたて助詞の機能と解釈」制約に基づく日本語の構造の研究共同研究会発表要旨
益岡隆志 1991『モダリティの文法』くろしお出版
南不二男 1974『現代日本語の構造』大修館書店
———— 1993『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
三原健一 1994『日本語の統語構造 生成文法理論とその応用』松柏社
森田良行 1972「「だけ、ばかり」の用法」『早稲田大学語学教育研究所紀要』10
森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院
矢澤真人 1983「情態修飾成分の整理」『日本語と日本文学』３
———— 1985「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』XXIII
———— 1987/88/89「連用修飾成分による他動詞文の両義性 / 続１ / 続２」『国語国文論集』16/17/18
———— 1987「頻度と連続――連用修飾成分の被修飾単位について――」『学習院女子短期大学紀要』XXV
———— 1993「いわゆる「形容詞移動」について」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂
山田孝雄 1908『日本文法論』宝文館出版
渡辺実編 1983『副用語の研究』明治書院